

小児科

■ スタッフ

科長		駒田 美弘
副科長		平山 雅浩
医師数	常勤	7名
	併任	6名
	非常勤	7名

■ 診療科の特色・診療対象疾患

1. 診療科方針

- 1) 当小児科の目標は（1）優秀な小児科医の育成と小児医学研究の推進、（2）小児科専門分野の充実と小児医療施設の特色作り、（3）地域の特性に応じた小児医療提供体制の整備・充実の3つであります。
- 2) 医学教育の充実、先進的医療の実施、地域医療への貢献はもちろんですが、「21世紀を子どもの世紀に」、「三重から世界へ、世界から三重へ」をキーワードにして、優れた小児科医を育成し、安全で高度な小児医療を提供するとともに、国際的に認められる医学研究の成果を発信していくことを目指しています。

2. 主な診療対象疾患とその体制

- 1) 三重大学小児科では多岐にわたる小児科疾患のうち、主に血液疾患（白血病、再生不良性貧血、免疫不全など）、悪性疾患（神経芽腫、ウィルムス腫瘍、骨肉腫、横紋筋肉腫、脳腫瘍など）、循環器疾患（先天性心疾患、川崎病冠動脈障害、肺高血圧など）、新生児疾患（低出生体重児、合併奇形を伴う重症新生児など）およびその他の重症疾患を扱っています。
- 2) 当小児科では国立病院機構三重病院（感染症、アレルギー、腎疾患、神経疾患、他慢性疾患）および三重中央医療センター（周産母子センターNICU）と連携し、三重子ども病院群を形成し、それぞれの病院が専門分野を分担することで高度な医療サービスを提供しています。

■ 診療内容と診療実績

小児病棟では主に血液悪性腫瘍患者および小児循環器疾患を主に診療をしております。2013年度で入

院患者数は642名で、血液腫瘍疾患241名、小児循環器疾患94名、その他19名の入院がありました。

小児悪性腫瘍に関しては三重県内の血液悪性腫瘍は当院にすべて集約して入院治療を行っています。新規の小児血液腫瘍疾患は44名で、内訳は白血病12名（急性リンパ性白血病10名、急性骨髄性白血病1名、分類不能白血病1名）、脳腫瘍7名、悪性リンパ腫3名、神経芽腫3名、骨肉腫4名、ユーイング肉腫5名、ウィルムス腫瘍3名、その他7名であった。その他の疾患には横紋筋肉腫、肝芽腫、ランゲルハンスヒスチオサイトーシス、血球貪食症候群、奇形腫などが含まれます。悪性腫瘍の治療は化学療法、放射線療法、外科的治療を含む集学的治療を他科との協力のもとに行っています。特に先進的医療として造血細胞移植を行っていますが、2013年は3例の同種造血細胞移植を行いました。

循環器疾患に関しては、日本小児循環器学会専門医修練制度の開始と共に県内の心臓カテーテル検査及び治療は当施設に集約し、2009年87件（うちカテーテル治療が24件）、2010年104件（40件）、2011年141件（45件）、2012年131件（47件）、2013年79件（9件）の件数を行いました。特に高度な心房中隔欠損カテーテル閉鎖術に関してはこれまで27例行い、全例成功しています。

小児科外来は主に専門外来を中心に診療が行われ、血液専門外来を毎週火曜日、血液長期フォローアップ外来を毎週水曜日、循環器外来を隔週月曜日と毎週金曜日に開設しています。他に、内分泌外来、あゆみ外来、乳児健診外来、予防接種外来、小児心療内科外来も開設しています。2013年の1年間の外来件数は5,495件であり、このうち血液専門外来が1,500-2,000件、循環器外来が700-900件を占めています。

■ 診療施設の特色

三重大学附属病院は小児科専門医研修施設であるとともに、小児血液・がん専門医研修施設および小児循環器専門医修練施設に認定されています。

また2013年2月には厚生労働省指定の小児がん拠点病院全国15施設のうちの1つに選定されました。

当科スタッフの取得専門医・指導医は日本小児科学会小児科専門医・指導医、日本血液学会専門医・指導医、日本がん治療認定機構がん治療認定医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医、日本小児血液・がん学会暫定指導医、小児循環器専門医、新生児暫定指導医などを有しています。

1956年より小児がん診療を開始し、1973年血液腫瘍専門外来を開設し、1998年から長期フォローアップ外来を開設しています。長期生存している小児がん経験者の健康管理、晩期障害の予防、早期発見、早期治療を他科と連携して実施しています。昨年1年間で受診した18歳以上の受診者数は約350名で、治療後10年および20年の受診継続率はそれぞれ88%と52%と大変高率です。

治療終了後の地域機関との連携については地域基幹病院、プライマリーケア医との連携体制が整備されています。2012年1月には当院医療福祉支援センター内に小児在宅医療支援部を新たに設置しました。県看護協会、医師会、理学療法士会、作業療法士会と連携を諮るとともに、地域在宅支援診療所および訪問看護ステーションが連携窓口となり、受入可能施設の拡充・啓発を行っています。小児がん患者およびその家族が安心して地元地域・自宅に戻れる支援体制が整備されています。

- 一ター断層撮影装置 (MDCT) による評価
- ⑥ 造血細胞移植におけるブスルファン注射剤の至適血中濃度と体内動態に関する研究
 - ⑦ 抗がん化学療法が小児がん患者の味覚、嗅覚に及ぼす影響についての検討
 - ⑧ 小児医療におけるプレパレーションの多様性
 - ⑨ 骨軟部腫瘍における癌抑制遺伝子 hDLG1 および関連遺伝子の発現に関する研究
 - ⑩ サイトカイン産生細胞測定による造血細胞移植後慢性 GVHD の評価の研究
 - ⑪ 進行期神経芽腫における多次元フローサイトメトリ法及びリアルタイム PCR 法における微少残存病変 (MRD) モニタリングの確立と骨髄転移に関する分子の探索研究
 - ⑫ 進行期神経芽腫に対する KIR リガンドミスマッチ同種臍帯血移植の有効性に関する研究
 - ⑬ MLR-ELISPOT 法を用いた造血細胞移植における急性 GVHD の予測に関する研究

臨床研究等の実績

三重大小児科では白血病を主とした小児がんの免疫診断を全国の小児がん治療専門施設から依頼を受けており、全国的な治療グループである日本小児白血病リンパ腫研究グループ (JPLSG) の中央マーカー解析センターとしても機能しています。特に現在は微少残存腫瘍 (MRD) の臨床研究を急性リンパ性白血病および急性骨髄性白血病での治療研究が開始されました。

小児血液腫瘍の臨床研究は JPLSG のすべての臨床研究を行い、固形腫瘍においても小児固形癌臨床試験共同機構研究グループに参加して行っています。

過去5年間の臨床研究実施状況としては造血器腫瘍の多施設共同研究17件、固形腫瘍多施設共同研究6件、ゲノム解析研究4件、小児がん疫学研究4件、三重大学独自の研究9件及びその他3件を実施しています。

現在実施中の三重大小児科の最近の研究としては以下にあげられます。

- ① 難治性神経芽腫に対するポリオウイルスの安全性と有効性の評価を目的とした第I相臨床試験
- ② 子どもの「いのちの教育」における小児看護の役割
- ③ 小児熱性疾患におけるテネイシン C の有用性に関するレトロスペクティブ研究
- ④ 川崎病後遠隔期における冠動脈病変の新規冠動脈画像診断法による評価
- ⑤ 川崎病後遠隔期における冠動脈病変のコンピュ

<http://www.hosp.mie-u.ac.jp/> (ホームページ)

<http://www.medic.mie-u.ac.jp/pediatrics/> (三重大小児科)